

戦国ものがたり

こばやしの



～島津と伊東の陣取り合戦～



小林市教育委員会

はじめに

小林市は、江戸時代、島津氏の治める薩摩藩でした。現在でもその歴史を物語る文化が色濃く残っています。方言や郷土料理だけでなく田の神像や輪太鼓踊り、兵児踊なども薩摩藩ゆかりのものがここ小林市には受け継がれています。

戦国時代において小林を含め今の宮崎県のほとんどを領有していたのは伊東氏でした。その領地は、今の延岡市、えびの市、都城市、串間市を除く範囲で西都市の都於郡城を主城として最盛期には領地内に48の城を持っていたと言われています（伊東四十八城）。かたや鹿児島県の全域とえびの市、都城市を領有していたのが島津氏でした。両者は、ともに南九州の覇者を目指し、領地境界線付近では争いを続けていました。

本冊子は戦国時代にこの地でどのようなことが起こって薩摩藩領となったのか時系列で記した物語です。伊東氏と島津氏の戦いに代表されるこばやしの戦国大河ドラマを楽しんでいただけたら幸いです。

この度「こばやしの戦国ものがたり」の冊子を発刊するにあたり、調査にご協力いただいた小林市ガイドボランティア協会の皆さまに心より感謝申し上げます。

本書が多くの皆様にご活用いただき、文化財愛護の精神が広まることを願っています。

平成31年3月

小林市教育委員会

戦国時代の主な出来事年表

年 代	日本の主な出来事
1467年	・応仁の乱 ☆国一揆・一向一揆 下克上の風潮が広まる
1543年	・ポルトガル人が、鉄砲を伝える
1549年	・キリスト教伝来
1560年	・桶狭間の戦い
1570年	・大友宗麟、九州の北半分を支配下とする
1572年	・木崎原合戦が起こる
1573年	・織田信長が室町幕府を滅ぼす
1575年	・長篠の戦い
1578年	・耳川の戦い
1582年	・明智光秀が本能寺で信長を殺害、秀吉が光秀を山崎で破る
1590年	・豊臣秀吉が全国を統一する ☆太閤検地・刀狩り
1592年	・文禄の役
1597年	・慶長の役
] 秀吉朝鮮出兵
1600年	・関ヶ原の戦い
1602年	・島津氏が家康に誓書提出 ・家康の全国統一が完成する
1603年	・徳川家康が江戸幕府を開く
1609年	・薩摩藩が琉球を征服する
1614年	・大坂冬の陣
1615年	・大坂夏の陣(豊臣氏滅亡) ・一国一城令が発令
1635年	・参勤交代制を定める

【本冊子について】

本冊子は、小林市史、野尻町史、須木村史ならびに他の文献等を参考に伊東氏と島津氏の戦いに代表される小林市の戦国時代の様子を時系列にまとめ、物語風に作成したものです。なお、本文中に記載されている戦の内容や兵の数については諸説あります。

○こばやしの戦国時代年表

- 1541年（天文10年）
北原祐兼、細野三ツ山城に居城。
- 1558年（永禄元年）
北原兼守、細野三ツ山城で死す。伊東氏は兼守未亡人に馬関田右衛門を配置して細野三ツ山城に居城させる。
- 1561年（永禄4年）
伊東義祐が細野三ツ山城を攻略。米良筑後守を配置。
- 1562年（永禄5年）
島津貴久、兵を飯野に進め細野三ツ山城で勝利、北原兼親に真幸院の地を領地として与える。
- 1564年（永禄7年）
飯野城に北原兼親、薩摩伊集院へ移り飯野城には島津義弘が居城する。

○北原と伊東と島津の戦国史

- このころの小林は真幸院北原氏の勢力下でした。北原氏は日向南部を舞台として北郷氏（都城）と戦いを繰り返していました。
- そんな中、1542年（天文11年）8月北原氏は伊東氏と連合して北郷氏の守る高城を攻めますが、北郷氏に負けてしまい多くの武将を失いました。北原氏は北郷氏を攻めながら人吉の相良氏にも備える必要があったので全力で戦えない事情がありました。連合軍とはいえ伊東氏も飢肥に力を割いていて万全ではありませんでした。さらに北原氏は1554年（天文23年）岩剣城の戦いに反島津軍で参加しましたが負けてしまいました。
- 1558年（永禄元年）北原氏当主兼守が三ツ山城で亡くなりました。伊東氏当主義祐は、兼守の義父であったので跡目争いに口を出し、1561年（永禄4年）には義祐に反対する勢力を力でねじ伏せて1562年（永禄5年）に北原氏の領地

だった小林、えびの、栗野、横川、高原を全て伊東氏の領地としました。しかし、北原氏当主兼親は島津氏・北郷氏・相良氏の協力を得て1562年の5月にはえびの、小林を奪い返しますが、1563年（永禄6年）兼親は伊東氏と相良氏の連合軍に敗れ、えびの、小林を奪い返されず。伊東氏・相良氏・菱刈氏の連合軍に耐え切れなくなった兼親は島津氏を頼ります。島津氏当主貴久は兼親に薩摩伊集院神殿（こどん）村に30町の領地を与え移住させます。これにより武家の棟梁としての北原氏は終わりを迎えます。1564年（永禄7年）現在の飯野は島津氏が小林は伊東氏の領地となりました。

①飯野城址



②水流迫六地藏幢



③三ツ山城縄張り図





こばやしに関する戦国の伝記・伝承 ①

○小林地方は、古代には夷守、中世には三ツ山と呼ばれ、亀ヶ城又は吉留城ともいう三ツ山城を中心に、官公衝や当地方の地所、熊襲鎮圧のための軍役所である夷守府もこの地にあったといわれています。細野の水落地区、宝光院の背後の山である鷹導山がこの三ツ山城跡といわれ、本丸・南出丸・東丸の三ツの山から成っていたので三ツ山とよんだと言われていています。

地図（文化財の場所）





○こばやしの戦国時代年表

- ・1566年（永禄9年）
伊東氏、小林に城を築き、飯野城を攻めようとする。小林城の城主は米良筑後守。島津義久は義弘・歳久を従え小林城を攻めるも落ちず。

○小林城攻防戦

・現在の宮崎県西部に位置する飯野に進出した島津氏、小林を領地にしていた伊東氏がいよいよ小林城にて激突します。当時の小林城の城主は米良筑後守でした。

・1566年（永禄9年）島津軍が真方にある小林城を取り囲みました。飯野に進出しようとする伊東軍とそれを食い止めようとする島津軍。島津軍

の大軍に取り囲まれた伊東軍は籠城を余儀なくされます。しかし、周囲を川で囲まれた小林城は天然の要害でした。

・島津軍が約10万の兵で城に攻めかかります。はじめ、島津軍は2日で攻め落とす予定にしていたが、戦いは非常に激しく両軍とも多くの死傷者が出ました。それでも島津軍は、攻め続け後は本丸を残すのみというところまで攻め込みました。しかし、そこへ伊東軍の援軍が須木から到着し、稻荷山に陣を敷いて島津軍を攻め立てたため、形勢は逆転しました。矢、火矢、火玉等須木からの援軍は島津軍へ総攻撃。島津軍の死傷者はさらに増え、空堀を埋め尽くすほどだったと伝わっています。島津義弘も援軍からの攻撃で負傷し島津軍は退却しました。

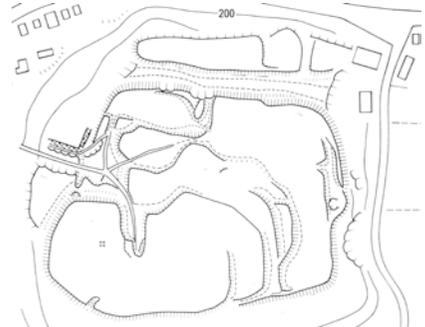
・伊東軍は城を守ったのです。その後勢いに乗る伊東氏は日南飢肥も手に入れ、飯野、えびの方面へ進出していくのでした。

・現在、小林城址は島津軍の攻撃に耐え、落ちることがなかった城ということで、受験や資格試験などにとっても縁起がいい城として人気の城です。

④小林城址



④小林城縄張り図





こばやしに関する戦国の伝記・伝承 ②

○ 1566年（永禄9年）に島津義久、義弘、歳久兄弟は、伊東家が建設中の小林城を攻め取ろうとしましたが大苦戦。なんとか城を焼き本丸を残すのみとなったところで伊東軍の援軍が現れ、義弘が大怪我したことで島津軍が撤退して戦いは終結しました。しかし、小林城の内堀と外堀が双方の軍の将兵や馬の死体で埋まるほどの大激戦となった戦いでした。

そこで、忠良（日新齋）と貴久は双方の死者を弔うために「南無阿弥陀佛」が冠された和歌を発句して残しています。

・忠良（日新齋）

南： 何事も 何事もみな 南無阿弥陀仏 なほ討死は 名をあぐるかな
無： 無益にも むつかしき世に うば玉の 昔のやみの 報いはるらん
阿： あしき世に あらゆる物も あしなれば あからさまには あらじ身のはて
弥： 南には 彌陀観音の 御座なれば 身まかる時も 御名を唱えよ
陀： 誰にかも 誰ぞと問わん 誰しかも 誰かは獨り 誰かのこらん
佛： ふつつつと ふつと世も身も ふつきりに ふつとくやしく ふつと悲しも

・貴久

南： 名を重く おもふ心の 一筋に 捨てしや軽き 命なりけり
無： むらむらに しぐるる今日の 柴よりも 昨日の夢ぞ はかなかりける
阿： ありはてぬ 此の世の中に 先立つを 歎くぞ人の 迷なりける
弥： 水のあわの あはれに消えし 跡とてや 折々ぬるる 袂なりけり
陀： 立ちそえる 面影のみや なき人の 忘れがたみと 残し置きけん
佛： 佛ます 世をいづくとや たづぬらん 呼べば答ふる 山ひこの聲

この二人が同時にこのような発句をした例は他にはありません。相当の死傷者が出たものと考えられます。（ちなみに木崎原合戦の頃は二人とも既に他界しています。）

地図（文化財の場所）





○こばやしの戦国時代年表

- ・1572年（元龜3年）
木崎原の戦いで島津義弘が伊東氏を破る。

○粥餅田古戦場跡

- ・1572年（元龜3年）勢いに乗る伊東氏は、島津氏の所有するえびのの飯野城、加久藤城へ攻め込みます。飯野城には城主島津義弘が構えていました。伊東軍はこの戦いを一大戦局と捉え、伊藤祐安や伊東新次郎ら

5人の大将と主力幹部級を集めた大軍を率いて進行を開始しました。伊東軍は2手に分かれ、飯野城と加久藤城を攻め立てますが大軍を擁しても加久藤城を攻略できず、本体と合流し島津軍とえびのの木崎原で対峙することとなりました。これが「木崎原の戦い」です。大軍であったために油断していた伊東軍に対し、地の利を生かし少数精鋭で戦った島津軍。お互い多くの戦死者を出し、結果島津義弘の采配が実り島津軍が勝利しました。

・戦いに敗れた伊東軍は小林城へ敗走しました。それを追って島津軍が粥餅田に差し掛かった時逃げる一団を発見しました。「逃げるとは卑怯なり、返せ。」と島津義弘が叫ぶと、その声に反応した二騎が引き返しました。引き返した一騎、柚木崎丹後守は島津義弘との一騎打ちとなりました。柚木崎丹後守が義弘めがけて必殺の槍を一突きした時、義弘の馬が前足を折り曲げたため、槍はそれで義弘を討ちとることができませんでした。逆に柚木崎丹後守は島津義弘に討ち取られてしまいました。戦いが終わった後、島津方の女性たちが粥を持ち、兵士たちへ与えたので粥餅田と名がついたとも言われています。

- ・なお、柚木崎丹後守は、槍の名手とも弓の名手とも伝わっています。
- ・ここは小林で唯一の木崎原の戦いの古戦場跡です。
- ・さらに、前足を曲げて義弘の身を守った馬は、「膝付き栗毛」（膝突栗毛とも）と呼び、後生大事に育てられて83歳まで生き永らえました。「膝付き栗毛」の死後は鹿児島県の帖佐にある亀泉院に葬られて墓碑も建てられています。
- ・この戦いにより伊東軍は、5人の大将と米良筑後守といった幹部級の主力が戦死してしまい伊東軍に多大なダメージを残した歴史的な大敗となりました。

⑤粥餅田古戦場跡



⑥木崎原古戦場跡





こばやしに関する戦国の伝記・伝承 ③

○木崎原の戦いが起こる前、伊東軍は義弘の飯野城を落とすべく度々真幸院へ進出を繰り返していました。木崎原の戦いの5ヶ月前も伊東軍は真幸院へと進出し民家を焼くなど挑発行為をしていました。ある日の晩、一人の女が迷い込んできました。伊東軍はこの女を連れてきて話を聞くと、女は飯野城の西、義弘の妻子が住まう加久藤城の女中であることがわかりました。女中は、ある武士と不義密通を重ねていたのですが、遂に事が露呈してしまって、明日罰せられることになっていました。しかし、義弘の妻である実相院がこれを哀れに思っ、自身の住む部屋に通じる「鑰掛口」よりそっと逃がしてくれたというのです。女中は相良領へと逃げようと思ひ向かった所、加久藤の峠は山深い上に険しく、心細くなってこの伊東軍の陣にやってきたということでした。伊東軍はこの女中を不憫に思い、対島津の防衛拠点である三ツ山城へと連れて行ってそこの女中として雇いました。そして女中から島津家の内情を問いただし始めました。

女中が言うには、加久藤城には義弘の妻子ら50名ほどの兵しかいないこと、また自身が逃げてきた鑰掛口は、攻められるともろい場所と教えたのです。

伊東軍は、この情報を基に1572年（元亀3年）5月4日の未明、飯野城の先にある加久藤城の鑰掛口を攻める計画で進軍して行きました。しかし、そこは狭い細道になっていてさらに鑰掛口は絶壁でいくら攻撃してもビクともしませんでした。

実は鑰掛口とは、その名の通り鉤を掛けて登らなくては通れないというほどの入口だったのです。そしてこの女中は、実は義弘が遣わした間者だったのです。

まんまと騙された伊東軍は疲労困憊、やむを得ず兵を引いた先で暑さから水浴びをして沢山の将兵が討たれたのは史実の通りです。



こばやしに関する戦国の伝記・伝承 ④

○真幸院を手に入れようとして、加久藤城に攻め込んだ伊東軍は、池島村の木崎原にて大敗し、三ツ山に逃走しました。逃げた伊東軍を追って島津義弘が三ツ山の粥餅田まで来たところ、伊東軍の副将、柚木崎丹後守が1隊50～60人の殿として、一糸乱れず退くさまが見えた。義弘が大声一番「逃げるとは卑怯、返せ。」と叫んだところ、丹後守は騎を返し、弓を引いて矢を放とうとしたので、義弘が更に大声で「見どもは島津兵庫の頭ぞ。」と叫んで、その形相は鬼神のようだったそうです。その勢いに圧倒された丹後守は思わず弓を投げ捨て、馬から降りてひれ伏しました。その時義弘が槍を丹後守に突き出した時、義弘の騎馬が膝をついたといわれています。この馬は牝馬で、後に膝突き栗毛と呼ばれるようになり、83歳まで長生きして、義弘が移り住んだ鹿兒島線の帖佐の亀泉院に丁重に葬られたそうです。

○こばやしの戦国時代年表

- 1576年（天正4年）
島津氏、高原城攻略。
守将伊東勘解由は野尻へ退却。
小林城主米良美濃守、島津氏に降り
小林城は島津氏の所有になる。
- 1577年（天正5年）
野尻城主福永丹波守は島津氏に城
を開城する。
この年伊東義祐ら、日向を退去す
る。日向は島津氏の一国知行とな
る。この頃、上井次郎左衛門秀秋、
小林地頭に着任する。

○伊東義祐の凋落

- 木崎原の戦いに敗れた伊東氏は、戦いで5人の大将と幹部級の主力が戦死してしまいます。この敗戦をきっかけに伊東氏の勢力は急激に衰退していきます。勝利した島津氏は勢いそのままに1576年（天正4年）高原城を攻めます。伊東氏も籠城して抵抗しますが3日間の攻防の末、高原城は陥落し城主の伊東勘解由は野尻城へ退却しました。戦勝して入城した島津義久は部下の上原長門守尚近に高原城を守らせました。
- 須木城を居城としていた伊東方の米良美濃守重矩は高原城が陥落したこの機会に伊東義祐への遺恨もあって須木城と小林城を島津氏へ明け渡し、後難を恐れた近隣の内木場城・岩牟礼城・野首城・

奈佐木城などの城も投降しました。

• 多くの城を失った伊東義祐は野尻城に福永丹波守を配置しましたが、高原城主となった上原長門守の謀略や福永丹波守自身の伊東義祐に対する日頃の恨み、辛みが重なって1577年（天正5年）福永丹波守は上原長門守の兵を野尻城に向かい入れて、島津氏に城を明け渡しました。つづいて戸崎城も島津氏の手落ち、紙屋城主米良越後守も降伏して、伊東義祐は佐土原城までの撤退を余儀なくされました。伊東氏の勢力と求心力の低下により木崎原の戦いからわずか4年で小林の伊東支配は終わりを告げたのでした。

⑦野尻城井戸跡



⑦野尻城縄張り図



地図（文化財の場所）



○こばやしの戦国時代年表

- ・1587年（天正15年）
豊臣秀吉、九州島津討伐の軍を送る。
豊臣秀長、野尻東麓に陣営を敷く。
- ・1595年（文禄4年）
伊集院忠棟、都城へ。
- ・1597年（慶長2年）
島津義弘、領内における一向宗の禁止を明文化。

○九州の覇者、島津氏

- ・小林を勢力下においた島津氏は、勢いそのまま次々と伊東氏の領地を手に入れていきます。島津氏の攻勢に耐えられなくなった伊東氏は日向国を追われ、豊後の大友氏を頼って落ち延びます。しかし、大友氏・竜造寺氏も打倒した島津氏は、九州のほぼ全域を手中に治め、九州統一まで、あと一歩のところまで勢力を拡大していました。
- ・この島津氏の九州統一の夢を打ち砕いたのが豊臣秀吉です。このころの秀吉は本能寺の変で自害

した織田信長の後継者として本州を統一していたところで、秀吉は大軍を率いて九州に降り立ちます。これが秀吉の九州平定です。秀吉軍は福岡→熊本→鹿児島ルートで、弟の秀長軍は大分→宮崎→鹿児島ルートで島津氏を挟み込む形で進軍していきます。秀長軍が陣を張った場所が現在も野尻町の地名（陣原）として残っています。最終的には秀吉に全面降伏したことで、これまで手に入れた九州の領地も秀吉に没収されていますが、鹿児島県全域とえびの、小林、綾、国富、高岡、都城といった地域は島津氏の領地として安堵されました。そのため小林は薩摩文化が多く残っています。隠れ念仏もその一つです。

・薩摩藩では、戦国時代末期から一向宗が禁制されていました。1597年（慶長2年）島津義弘が朝鮮出兵の際、留守に残した掟書の中に一向宗禁制が明文化されています。なぜ、禁制になったのかというと、一向宗の開祖である親鸞の教えそのものが当時の武士社会にとって、そぐわない内容であったからだといわれています。しかし、藩の厳しい弾圧にもかかわらず、人々は密かに信仰を続けたといわれています。人里離れた洞窟など様々な場所に夜、隠れて集まり講話を聴いたり念仏を唱えたりしたそうです。

⑧永久井野かくれ念仏洞



⑨岩牟礼城址





こばやしに関する戦国の伝記・伝承 ⑤

○島津忠良（日新齋）の作歌に次のようなものが残されています。

魔のしょゐか天けんおかみ法華教 一向宗にすきの小座敷

（天権を拝んだり法華や一向宗・茶道にハマったりするのは、魔に魅入られたせいである）

織田や徳川のように島津もまた一向宗に苦しめられたのでしょうか。

また、この一向宗を利用しようとしたのが九州征伐時の豊臣秀吉です。島津家を内側から混乱させるために顕如を天草に送り込み島津領内の門徒に蜂起を呼びかけさせたといわれています。この効果は不明ですが後に島津領内において一向宗はキリスト教とともに禁教となってそれは明治維新まで 300 年近く続きました。

地図（文化財の場所）



○こばやしの戦国時代年表

- ・1599年（慶長4年）
庄内の乱
- ・1600年（慶長5年）
伊集院忠眞、頼娃へ
- ・1602年（慶長7年）
島津忠恒、伊集院忠眞を暗殺。

○庄内の乱と伊集院忠眞暗殺事件

・島津氏の九州制覇や秀吉の島津攻めの戦後処理において、多大な功績のあった筆頭重臣伊集院忠棟が宗家乗っ取りの陰謀があると疑われて、島津義弘の子忠恒（のちの第18代藩主家久）によって殺害されました。この理不尽な仕打ちに、忠棟の子忠眞は都城（庄内）を本陣に12の支城の防備を固めて島津宗家に公然と反旗を翻して、島津氏家中最大の内乱（庄内の乱）となりました。

忠恒率いる島津軍は、島津豊久、新納忠元、樺山久高、北郷氏など総勢3万の兵。対する伊集院軍は忠眞を中心に一族や智将白石永仙ら家臣8千でありましたが、怒りで士気の上がる伊集院軍は、地の利もあって、戦いは膠着状態となっていました。徳川家康の2度にわたる仲介で和睦して終息しました。

・忠眞は南薩の頼娃1万石へ移されて、その後帖佐2万石を与えられました。

しかし、忠眞の帰属後も義弘、忠恒は疑いと警戒の念を解くことはなく、関ヶ原の戦い後、義弘の名代として上洛することになった忠恒は、忠眞に随行を命じて謀殺しようと計画しました。道中逗留した野尻での鹿狩りで穆佐の地頭、川田国鏡に殺害を命じました。射殺の命を受けた穆佐の地頭配下の、押川治右衛門と淵脇平馬の銃弾は、誤って島津家の家老、平田増宗の嫡男新四郎を殺害してしまい、忠眞は伏兵によって斬殺されました。押川は誤射の責めを負って自害し、淵脇は切腹したとも、匿名をもって義久の領内に住まわされたともいわれています。

・庄内の乱後に島津諸家に預けられていた3人の弟や母親は、忠眞が討たれた日に全員殺害され、伊集院一族はことごとく、肅正されました。

⑩伊集院忠眞の供養塔



⑪平田新四郎・押川治右衛門の供養塔



地図（文化財の場所）



○こばやしの戦国時代年表

- ・1604年（慶長9年）
島津豊久家臣団、佐土原より小林に移住。
- ・1615年（元和元年）
一国一城令により、三山城、小林城が廃城。真方に地頭仮屋を置く。

○関ヶ原の戦い後

- ・1600年（慶長5年）関ヶ原の戦いで西軍豊臣方に属した佐土原領主島津豊久は戦いで戦死し、跡継ぎがいなかったために、佐土原領は徳川家康に没収されました。主を失った島津豊久家臣団のうち120家が島津分家永吉侯の飛領地であった小林温水村に移住しました。佐土原の堤村を懐かしんでこの地を堤としたと伝わっています。

- ・堤村は以来明治維新まで永吉侯の支配下にありました。

た。明治39年関ヶ原三百年祭が堤の有志によって盛大に行われ、旧主豊久侯の軍功を称え、関ヶ原に散った先祖の霊を慰めると共にこれまでの苦難の日々を偲んで関ヶ原記念碑が建立されました。

・薩摩藩は、領主名代として地頭を直轄地に置いて統治し、地頭は小林城に在住しました。1615年（元和元年）大名の居城を一つに限るという一国一城令が布告されて、三ツ山城・小林城は廃城となりました。この時上の馬場に地頭が仮に住む場所、地頭仮屋が置かれました。地頭は小林城からこの仮屋に移り住んで1871年（明治4年）の廃藩置県までここで小林を統治しました。1877年（明治10年）小林の地頭仮屋は西南戦争時の西郷軍の焦土戦術により焼失しました。同じように須木、野尻にも地頭仮屋が置かれました。

⑫関ヶ原記念碑



⑬小林地頭仮屋跡
小林市真方





こばやしに関する戦国の伝記・伝承 ⑥

○かつて小林を含む今の宮崎県のほとんどを所有していた伊東氏は、その後どうなったのでしょうか？伊東氏は度重なる敗戦を経験しても一族絶えることなく、豊臣秀吉の九州平定の際は秀吉傘下に入り活躍し、秀吉から飢肥（現在の日南市）を与えられ大名として復活を成し遂げました。さらに、関ヶ原の戦いでは東軍の徳川家康に付いたため、所領を安堵され江戸時代を通じて飢肥藩伊東氏は存続することになったのでした。

地図（文化財の場所）





こばやしに関する戦国の伝記・伝承 ⑦

○1579年（天正7年）、とある仲介者を通して織田信長から島津義久へ「日向鷹献上を促す」手紙が来ました。義久が手紙を無視していたら今度は雅の友、細川幽斎から義久へ手紙が届いたのです。内容は、「足利義昭様が日向鷹を所望するという書状と義昭様からの小袖を送ります。名誉なことですからお引き受けして下さい。」

信長に贈ってないのに義昭に贈ったら角が立つだろうと、手紙を無視していたら先のとある仲介者から「日向鷹を信長に献上せよ。」と催促が来ました。義久もこれを無視。義久が無視するのは訳がありました。

全国にも名高い日向鷹にことよせて、信長は大友と島津の和睦を要求していたのです。鷹を献上したら和睦の話を承諾することになってしまいます。

義久が手紙を無視し続けたら、遂にしびれを切らしたのか1580年（天正8年）、信長から仲介者無しで直接手紙が届けられました。

「大友との争いをやめる事、本願寺が石山を出て紀伊に入った事、毛利成敗のため大友と協力し天下のために大忠を尽くすこと！」

それでも無視を続ける義久に翌月も信長は大友との和睦を勧告しました。

義久は諸情勢を考え不承不承和睦を引き受け、その証としてかねてより催促されていた日向鷹を信長へ献上したのです。

ここに出てくる「とある仲介者」とは島津義久に古今伝授をした人物であり、信長とは鷹狩り仲間である関白、近衛前久のことです。

近衛は古今伝授で薩摩に下向した時も犬追物見学会など豪華接待を受けています。その前久、信長へ日向鷹献上の催促をするときに便乗して、「信長に献上するときには鷹にも1羽」と言っていました。近衛の要求は信長とともに無視されて、途中からは近衛の頭越しで交渉は進み結局、日向鷹は信長に献上されました。日向鷹が手に入るという話を信長本人が自慢でもしたのか相変わらず耳聡い近衛は、鷹情報を得ると再び今度は個人的に義久へ手紙を書きます。「信長に鷹を贈ったのだろう？鷹にも1羽」

たぶん義久は気分を害したのだろう日向鷹が近衛に贈られることは無かった。

・地元の古老の方の話では、室町時代から江戸時代にかけて、日向鷹を育成していた鷹匠がいた場所として、小林市の幸ヶ丘あたりと野尻の東麓あたりがそうではないかと、考えられるそうです。



こばやしに関する戦国の伝記・伝承 ⑧

○島津軍は、朝鮮出兵時に猫を連れて行って時間を計ったというのは有名な話ですが、朝鮮に連れていった猫は、7匹いて2匹は生きて帰ってきましたが、5匹は残念ながら死んでしまいました。5匹のうち、2匹は小林から連れて行ったらしく、1匹は須木からもう1匹は東上町あたりから連れて行ったと伝わっています。そのためそこには亡くなった猫のために猫塚が造られたそうです。そしてその猫塚があった場所を、「猫塚」と呼んでいましたがいつの間にか「猫坂」に変わっていき現在「猫坂」の名前が残っているのだそうです。



こばやしに関する戦国の伝記・伝承 ⑨

○島津義弘には、北郷忠孝の娘・園田清左衛門の娘（広瀬氏の娘とも言われる、宰相殿）の2人の妻がいたことが島津氏側の系図には書かれています。しかし、実は他にも知られざる妻がいたようです。義弘は隣国・肥後の相良氏から嫁を取りました。それは、政略結婚だったと思われる。時期もはっきりしませんが、おそらく義弘が島津豊州家との養子縁組を解消し最初の嫁と離婚したころであろうとされています。ところが、そのうちこの相良氏の嫁とは離婚してしまいます。この時期もはっきりしていませんが、相良氏と島津氏の抗争が再び勃発したことが原因で離婚したと思われます。さて、気の毒なのはこの嫁です。事情ははっきりしないが実家の相良家に帰ることも出来ません。帖佐の辺川と言う所に屋敷と堪忍扶持を与えられて住んでいたのが「辺川殿」といわれていました。しかし、そのうち彼女が島津側の情報を逐一相良側に通報しているという噂が立ちました。義弘は当然怒り狂い、辺川殿とお付きの女中を「たまには息抜きでもどうですか」と誘い出しました。長い幽閉生活に疲れ切っていた辺川殿一行は義弘が怒り狂っているとは知らずこの申し出を受けました。そして、辺川殿一行は駕籠に乗せられて遠くに連れていかれてしまいました。最後は須木村（宮崎県西諸県郡あたり）の山中に突如放置され、駕籠かきやお付きの侍は逃亡してしまったのだといわれています。地理も分からぬ山中に放置された辺川殿一行は何とか下山しようと様々努力を重ねましたが、遂に遭難し、全員が餓死したといわれています。そのうち、無念の死を遂げた辺川殿一行は島津氏に崇りを為すようになり、それに悩まされた義弘・家久（忠恒の方）親子は加治木に神社を造られ奉られるようになったそうです。

上記の話は主に『加治木郷土誌』の「隈姫神社の話」を参照。

ただし、辺川殿なる女性は肝心の相良氏側の史料には出てきません。また、「辺川殿は離縁後相良氏に返してもらえなかったことを遺恨に持ち、義弘を呪ってやると願を掛けて腕にお灸をすえ続けて、最後は全身火傷して死んだ」という説もあり、いろいろと謎が多人物です。



こばやしに関する戦国の伝記・伝承 ⑩

○戦国の世、三ツ山地方を領有していた伊東氏が、小林の田間というところに城を築いて小林城と称したのですが、その後、伊東氏を破った島津義弘も天正5年に小林城に地所を置いて、人心一新のため当地方の地名を小林といった。築城された小林には、その昔、小さな松林があったので小林の名前が生まれたと伝わっています。



⑭伊東塚

木崎原の戦いで戦死した伊東軍の武将
伊東加賀守などの供養塔。

宮崎県指定史跡



⑮米良筑後守の墓

木崎原の戦いで戦死した須木城の城主
米良筑後守の墓

石塔が並ぶ中で「龍室玖虎」と刻まれたものが
米良筑後守の墓とされる。



⑯米良筑後守の首桶

木崎原の戦いで戦死した須木城の城主
米良筑後守の首を納めていた首桶。

檜の薄板を曲げて桜の皮で留めた丁寧な造り。



⑰紙屋城址

S字型の連郭式山城。
伊東 48 城の 1 つ。

写真は紙屋城第二の空堀跡。



⑱戸崎城址

東、南、北の三方を深い谷に囲まれる
要害の地。
絶えず野尻城と連携を取った城。
伊東 48 城の 1 つ



⑲須木城址

本丸を松尾城、その東が荒神城、北が肥田木城
と呼んでいる。
城主は米良筑後守。

伊東 48 城の 1 つ。



⑳高原城址

全方位とも険峻で深い谷に囲まれた天然の要害。
島津家臣の梅北掃部築城。

伊東 48 城の 1 つ



㉑加久藤城址

元は北原氏の城でその後島津義弘の広瀬夫人
と鶴寿丸を住ませた。

木崎原の戦いの舞台の 1 つ。

関連史跡所在地一覧

番号	名称	所在地
①	飯野城址	えびの市大字原田3555番地
②	水流迫六地藏幢	小林市水流迫字村前154番地6
③	三ツ山城址	小林市細野字水落
④	小林城址	小林市真方字下ノ馬場803番地5
⑤	粥餅田古戦場跡	小林市北西方字粥餅田2450番地46
⑥	木崎原古戦場跡	えびの市大字池島字西郷田437番地
⑦	野尻城井戸跡	小林市野尻町東麓字野首3691番地
⑧	永久井野かくれ念仏洞	小林市北西方字黒仁田4160番地7
⑨	岩牟礼城址	小林市東方字城ヶ迫
⑩	伊集院忠真供養塔	小林市野尻町東麓字夜川松1162番地1
⑪	平田新四郎・押川治右衛門の供養塔	小林市野尻町東麓字夜川松1162番地1
⑫	関ヶ原記念碑	小林市堤字三松3524番地1
⑬	小林地頭仮屋跡	小林市真方字上ノ馬場304番地1
⑭	伊東塚	小林市真方字因幡塚160番地2
⑮	米良筑後守の墓	小林市須木下田字坂の下
⑯	米良筑後守の首桶	小林市須木中原1741番地1(須木総合ふるさとセンター内)
⑰	紙屋城址	小林市野尻町紙屋字城原640番地34
⑱	戸崎城址	小林市野尻町東麓字出口1426番地1
⑲	須木城址	小林市須木下田字唐池
⑳	高原城址	高原町大字西麓字西城戸
㉑	加久藤城址	えびの市大字小田字城内1100番地

こぼやしの 戦国ものがたり

	<p>戦国時代の山城の跡だよ 小林城</p>		<p>戦国時代の戦場跡だよ 粥餅田</p>
	<p>戦国武将の墓の跡だよ 伊東塚</p>		<p>敵の侵入を防ぐ空堀が残る 紙屋城</p>
	<p>天下分け目の戦いの記憶 関ヶ原記念碑</p>		<p>戦国武将の首桶が今も残る 米良院後守</p>
	<p>先祖を敬い大切に建てられた 六地藏堂</p>		<p>戦国時代の井戸跡 残る 野尻城</p>

【こぼやし文化財かるた】